

楽園

エアコンの風にうちのめされた海が
我子を優しく包み
青い帽子を被ったぬいぐるみが
小舟をちょっと押し出せば
誰も居ないまま滑ってゆく
ストロマトライトの間を・・・
酸素の泡は船底をかすめていた

湿っぽい暑熱に満ちた大気は
一通の手紙を水に浸し
幸福に倦んだ言葉を浮かせ流すが
紙片を水より引き上げれば
そこには一つの文字も残らず
跡形もないことに愕然とする・・・
思い出とは無残なもの

孤独であることを許されなかった
そんな信じられぬ毎日が
僕を何と長い間押し込めていたことが
あの殺戮の時まで・・・
全ての単なる連なりが死に絶えた
あの時まで・・・
ああ、あの時まで

子を産めばその女は殺され
僕も妻を殺したばかり
今や残る者としては僕と
そして僕の子　　男の子ひとり
祈りの中に全ては許されてきた
言葉のないマドリガルが流れる
一枚きりのディスクから

おお！愛はかつて本当に在ったのか
全てが清浄に戻ったこの世界に
僕は横たわるだろう
そして我子は残されるだろう
全ての過ちが痕跡のみとなったこの世界に

死に絶える者として
ああ、狂気に死に絶える者として
全てを背負う者として
則ち、神として・・・

(1989.9.3)